

ルター新聞 Nr. 68

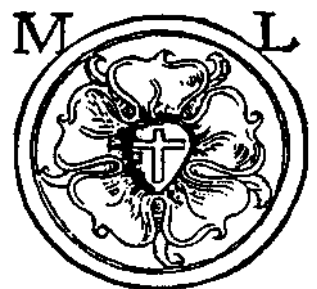
雑誌名	ルター新聞 = Die Luther Zeitung : ルーテル学院大学 (日本ルーテル神学校) ルター研究所ニュース
号	68
ページ	1-8
発行年	2017-04-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1075/00000650/



ルター 新聞

Die Luther Zeitung

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr.68



今号の内容

- 2面 カトリックとルーテルが宗教改革を共同で覚えるに当たっての「共同声明」について
- 3面 宗教改革五百年とは何か
- 4面 現代の教会のために歴史を語る聖書を翻訳するルター
- 5面 違う角度からの『マルティン・ルター』カスパー・板機卿の著作を勧める「ルター研究別冊4号」
- 6面 二〇一六年秋の講演会「キリスト者の自由」における憲の問題―石居所員鈴木長は歴的「ルーテル・カトリック合同礼拝」を報告グスターフ・アウレン「勝利者キリスト」十字架の愛
- 7面 切手シリーズ「ルター訳聖書」
- 8面 研究所ニュース



教会の歴史は改革の歴史

- ① キリストの福音をギリシャ・ローマ文化の只中で解釈し広く伝えた使徒パウロ。【1 世紀】
- ② 古代教会最大の神学者、西方教会の理論的指導者、ヒッポのアウグスティヌス。【4-5 世紀】
- ③ ボヘミヤの神学者、宗教改革の先駆け。火刑にあったヤン・フス。【14-15 世紀】
- ④ 福音の再発見、教会の再生に尽くしたマルティン・ルター。近代の幕開け。【16 世紀】
- ⑤ ルターの若き盟友メランヒトン。『アウグスブルク信仰告白』を起草。【16 世紀】
- ⑥ ツヴィングリ。スイスの宗教改革者。源泉志向、聖書のみ、信仰のみ。【16 世紀】
- ⑦ フランス語圏諸国の改革者カルヴァン。『キリスト教綱要』を著す。【16 世紀】
- ⑧ イギリスでの宗教改革を指導したクランマー。アングリカン＝聖公会。【16 世紀】
- ⑨ 百年ぶりに第二バチカン公会議を召集したローマ教皇ヨハネ 23 世。「現代化・刷新」【20 世紀】

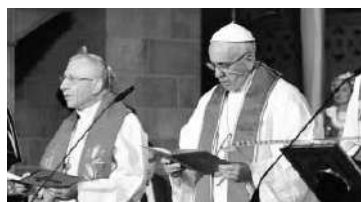
カトリックとルーテルが宗教改革を共同で覚えるに 当たっての「共同声明」について

所員 石居 基夫

二〇一六年一〇月三十一日、スウェーデンのルンドで行われたカトリック教会とルーテル世界連盟の「共同の祈り」の礼拝において、「共同声明」が公にされた。この声明はフランシスコ教皇とユナン連盟議長が署名をして発表されたのだ。

声明は、この宗教改革五百年を記念する時にルーテル教会とローマ・カトリック教会とが、この「共同の祈り」を持つことの意義を深く憶え、教会一致の歩みの恵みを証し、福音宣教の使命と神の創造されたこの世界に対する責任において協働していく決意と呼びかけを公にしたものだ。

全体は、五つの部分からなっている。(本文は、日本福音ルーテル教会機関紙「るうてる」の二〇一六年12月号に掲載された。また教会のホームページでも



見ることが出来る。)ここでは、十分な紙面は割けないが、部分ごとに表明されるその内容を簡単に解説したい。

まず「感謝の心をもって」。両教会がかつての分裂と対

立・争いのなかから、「相互理解と信頼を深めて」くることが出来たと喜ぶ。これは、両教会の間で、第二バチカン公会議以降の五〇年間で急速に進んだ対話と、世界におけるさまざまな支援活動の協力による成果であることを感謝のうちに告白している。

次の部分は、「争いから交わりへと変わっていく」。ここで印象深いのは、あの16世紀宗教改革の出来事が「霊的、また神学的な賜物」をもたらしたとしていえることだ。同時に、それは「教会の目に見える一致を傷つけてきた」ともいう。教派的視点に立つことよりも神の教会の歴史に自らを見る視点に導かれてきたことを示している。そして、悔い改めによつて、「和解の務めを妨げる歴史的な争いと不一致とを捨て去る」ことを決意し、「過去は変えることができない」が、「何が記憶されるのか、それがどのように記憶されるのかは変えられうる」と大胆に語る。「過去と現在のすべての憎しみと暴力、特に宗教の名によつて言い表されてきたそれらを強く斥け」、神が「すべての争い」を捨ててことを求めておられることと、「交わり」へ召しておられることを受け止め、そのための歴

史への責任を告白しているのだ。教会が現代の平和のために具体的に働くことを「争いから交わり」へ進んできた者の務めとしていることを表明しているのだ。これに続くのが「共に証しすることに

向けてのわたしたちの参与」。まず、教派間の相違や課題をこれからの歴史を歩む中で克服していくことが、キリストを証する両教会の使命であるという。具体的に目指す一致の姿は、「共なる聖餐」だ。カトリックとルーテルは、未だ聖餐を共にすることは出来ないでいる現実がある。しかし、霊的な飢え渇きを持つ人々をこの食卓に招こうとするのであれば、まず、両教会がこの食卓を共にすることが出来なければならないのではないかと自らに問うているのだ。

そして、この世への奉仕へと生かされていく必要を語り、いのちの尊厳と正義、平和と和解を求めている人々に「近づく」ように神が呼びかけておられると証する。「近づく」とは、具体的に問題に関わり、人々の苦しみに触れるということだ。共に生きることを神が求めている。福音を限られた人々の中にとどめるのではなく、苦難と困窮の中にある一人ひとりへと届けること、同時に、難民や亡命を希望する人々を具体的に受け入れていくことを求めている。

さらに、地球環境の問題への深い憂慮と責任を語る。人間が「開発と飽くことを知らない欲望」に支配されていて、被

造物全体を傷つけ、損なってしまっている現実を見つめる。だからこそ、この世界そのものに対する奉仕ということを地球規模において全面的に展開していかなければならないというのだ。「神の世界の可能性と美しさ」が失われていく危機感を持つているからこそ、いま、それを次の世代に、またその次の世代へと引き継ぎ、守らなければならないと表明する。

さらに「キリストにあつてひとつ」においては、多くのエキュメニズムの取り組みをしてきているキリスト教世界に対する感謝を述べ、またそうした大きな教会一致への願いを祈り続けてもらえるように願っている。カトリックとルーテルの両教会の交わりの成果が、一つの洗礼にあずかってキリストの体として結び合わされていることを生きようとする、世界のキリスト教会の一致運動との深い関係のなかに憶えられることに大きな意味があるといつてよいだろう。

最後は「世界中のカトリックとルーテルの人々への呼び掛け」。世界のカトリック教会、ルーテル教会の人々に、「一致という神の賜物が協働を導き、わたしたちの連帯を強めてくださる」ことを祈り求め、私たちが、「神の愛の真実の使者」たるべく自らを整えて、この「争いから交わりへ」という旅路をさらに歩み続けるようにと呼びかけることはで締めくくられる。

宗教改革 500 年とは何か

～より広く、より深く、より前へ～

今年には宗教改革五百年の年。どのような記念の年を迎えたらよいのでしょうか。

五百年前の出来事をただルターは偉い人だったと、記念するだけでは、あまりに後ろ向きです。

では、どのように記念すべきでしょうか。三つのポイントがあります。①視野の拡大、「より広く」ということです。②原点の確認、「より深く」ということ、③未来志向、「より前へ」ということです。

まず第一に①視野の拡大です。ルターと宗教改革について考えることは、ただルターのことだけでなく、より広くプロテスタント全体、いやキリスト教全体について考えるよい機会なのです。

いやいや、より広く、ある意味プロテスタントイズムが生み出したこの近代世界の全体、更には近代以後の世界についてさえ視野を広げて宗教改革のもたらしたものについて考えることが大事です。

宗教改革によって西欧キリスト教は、カトリックとプロテスタントに分裂しましたが、五百年後の今日、過去の分裂を克服し、力強くエキュメニズムを合言葉に進むことが必要ですし、進むことができるはずなのです。

第二点、②原点の確認です。より広く考えるとは、決して拡散を意味しません。むしろ逆に、ルターが本当に言いたかったことに私たちも集中することになるのです。それは何でしょうか。「恵みのみ」

ということ。信仰とか、教会とか、礼拝とか、聖書とか大事な事柄ばかりですが、しかし結局一番土台になっているのは間違いない神の恵み、「恵みのみ」です。ここに集中しましょう。原点です。

すると、この五百年の過去を振り返る時、反省だらけですが、しかし神の恵みの下に歩んできた「自信」もわいてくるのです。自信がわいてくる四つの文書（出来事）を挙げてみます。

ルターの「九五カ条」（一五一七年）、カトリックの「第二ヴァチカン公会議」（一九六二～六五年）、カトリック教会とルーテル教会が共同で出した「義認の教理に関する共同宣言」（一九九九年）と「争いから交わりへ」（二〇一三年）。しっかり学びたいものです。

そして第三点目は、③未来志向ということです。私たちは現実を直視しなければなりません。心、家庭、教育、仕事すべてが崩壊一步手前。情報過多、生命科学の暴走、戦争とテロと難民、そして原子力。すべてが私たち人間を苦しめています。現実です。

では、どうするのか。目を大きく未来に向けて、これが大事です。現代にルターが生きていたら彼はどうするだろうか。「ルーテル教会」をもう一つ作るだろうか。きっとそうではないでしょう。むしろ、皆で共に生きていく道を模索したにちがいないと思います。共生です。過去にこだわらず、自分だけの論理にし

がみつかず、目を前に向けて、神が造られたこのすばらしき世界を信じ前進したはず。すなわち「たとえ明日、世界が終ろうとも、今日私はリンゴの木を植える」。リンゴの希望です。
「リンゴの希望」を胸に私たちは、今年の11月、長崎（浦上天主堂）でカトリックとルーテル教会が共同で「平和」の祈りを捧げます。
（副所長 江口再起）

五百年記念行事（ルーテル教会・ルーテル学院大学神学校）

2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	(未定)
6～8日 25日	20日 28～30日	26日	3日 20日	5～7日	1日 17日	7～9日 22～23日	18日 23日 29～30日	7日 8～9日 28～29日	3日 4日 21～23日 23日	(大)市民講座(ルーテル学院大学)
(大)臨床牧会セミナー(ルーテル学院大学)	(大)聖歌隊・ハンドベル・ジョイントコンサート(J・東京教会)	(大)西教区五百年大会(J・大阪教会)	(大)クヌーテン講演会(ルーテル学院大学)	(大)NRK五百年礼拝(N・東京ルーテルセンター)	(大)デール記念講演会(J・東京教会)	(大)信徒と牧師のためのルター・セミナー(三浦海岸)	(大)ルターとバツハ・オルガンコンサート(ルーテル学院大学)	(大)ルーテル3教会合同礼拝(J・大阪教会)	(大)ルーテル諸学校合同研修会神戸ルーテル神学校	(大)ルーテル法人会連合総会(九州ルーテル学院)
(大)日本聖書協会講演会と晩餐会(朝日ホール)	(大)一日神学校(ルーテル学院大学)	(大)日本基督教学会学術大会(ルーテル学院大学)	(大)日本ルーテル学会学術大会(J・東京教会)	(大)教北道五百年合同修養会(J+N 札幌市駒岡保養所)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)
(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)	(大)教九州教区五百年大会(九州学院)

* (教) 教会関係

(大) 大学神学校関係

(J) JELC

(N) NRK

私のルター研究

現代の教会のために歴史を探る

所員 ティモシー・マッケンジー

私のルター研究はルターの神学がルーテル教会だけではなく、現代の世界にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしようというものです。例えば、一九一七年（大正六年）の日本における宗教改革四百年記念の際に、ルーテル教会とプロテスタント諸教会の多くはルターの神学が近代の教会と世界に対して大きな刺激を与えたと主張しました。この中でルターの神学へのエキュメニカルな理解の広さが明らかでした。多くの教派はルターの神学的遺産を自分の教派のものとして受け入れたことが目立っています。

私のルターの研究のもう一つの側面は、ルターと宗教改革の神学及び信条書がどのように日本に伝えられ、翻訳されたかという研究です。例えば、『一致信条書』の邦訳の歴史的背景を研究しました。日本福音ルーテル教会の初期の頃から現代までルーテル教会関係の信条書を翻訳する長い伝統があることが明らかになりました。

日本福音ルーテル教会の初期の宣教師と日本人は、ルーテル教会の歴史的な信仰告白を重んじ、それを当時の人々に伝えるために、一六世紀の信条書の中身を新しく翻訳しました。その後、新しい時

代のニーズに応じるためには、信条書が繰り返し新しく翻訳されました。これを以て、ルーテル教会の歴史的なアイデンティティが生まれたし、それは初期から現代まで継続されています。

私のルターの研究の三番目の側面は、エキュメニカルな側面です。例えば、一八九七年に出版された日本福音ルーテル教会の最初の式文である『礼拝式』の翻訳作業にエキュメニカルな協力があったことが分かりました。ルーテル教会の宣教師と日本聖公会の元伝道師の協力があり、さらに当時の日本基督教会の助けもあったのです。そして一八九七年の『礼拝式』は、一八八八年の三つの米国ルーテル教会の礼拝書『Common Service』の翻訳なのです。そして、さらに『Common Service』という式文の背景には、一九世紀の米国とヨーロッパにおける典礼復興運動の研究というエキュメニカルな協力の実りもありました。

幅広いエキュメニカルな立場からルターの研究をすれば、この関係をより深め、強くすることができると信じます。そして、み言葉と聖礼典の視点からの歴史的研究は現代の世界に対する公の信仰告白と礼拝に刺激と勇気を与えることができると思います。前の世代はどのよう

聖書を翻訳するルター

切り絵 竹田 孝一
文 鈴木 浩

ヴォルムス国会で帝国追放刑に処せられたルターは、ユンカー・イエルクという偽名でヴァルトブルク城に潜伏していたが、その間に新約聖書の翻訳に取りかかった。一五一六年には、ロットルダムのエラスムスによって新約聖書のギリシャ語校訂版が出版されていたが、ルターは一部それも使いながら、目覚ましい早さで翻訳を続けていた。完成された

翻訳は一五二二年九月に大判で印刷された新約聖書として出版された。これがいわゆる「九月聖書」である。ルター訳による聖書の最初の版である。

しかし、すぐに売り切れたのである。早くも同年の一二月には第二版のルター聖書があつて、何年か前に広島経済大学を訪れた際にそれを手にとつて見る機会があつた。一六世紀初頭に印刷されたとはとても思えないほど鮮やかな印刷であつた。ルター訳聖書は、その後、ルター自身も含め、繰り返し手が入れられて現在に至っている。

(竹田氏は大森ルーテル教会牧師)



ような状況の中で、どのように神の言葉を宣べ伝えたのかという問いは私たちにとつて興味深い問いです。私のルター研

究は現代の教会のために歴史に隠されている教会の告白を明らかにしようとする研究なのです。

違う角度からの『マルティン・ルター』

カスパー枢機卿の著作を勧める
徳善 義和



快である。

ルターの教会改革の訴えと呼び掛けに、当時のローマ・カトリック教会は対抗と、カトリック的改革とで答えたから、ルターは破門され、北ドイツから北欧にかけて広くルーテル教会の地域となり、教会分裂が決定的となった。続く時代は近代化の中でこれを固定化してしまった。

第二ヴァティカン公会議（一九六二―六五年）とそれに続く諸改革はカトリック教会を変えていく。ラテン語の礼拝から各国語の礼拝へ、聖書の各国語訳などに始まり、教会間の対話から共同の礼拝、「義認の教理に関する共同宣言」という教理的問題での相互理解など、エキュメニカルな関わりに大きな変化をもたらしつつあることは周知の通りなのである。

カスパー枢機卿は歴史上のこの流れ、この視点からルターを積極的に評価し、現代のキリスト教諸教会の関係にも生かそうとしているのである。私自身はこの流れが従来プロテスタント諸教会間でエキュメニズムと呼ばれ、実現されてきたものに決定的な一石を投じていると理解している。まさしく「エキュメニズムの視点から見るルター」なのであり、ここでもルターの宗教改革は続いていると言えるべきだろう。

（名誉教授）

「ルター研究別冊4号」

ルター神学の奥深さも面白さも示す

広島・松山教会牧師
伊藤 節彦

いよいよ宗教改革五百年の年を迎えた。

私たちの手元には既に「推奨四冊」が届き、各教会では学びが深められていることだろう。この出版事業の目的は「明日の宣教へ踏み出すために」であり、「過去に学び、今を問い、未来に踏み出す」という視点から生みだされてきたものである。

そしてその労を担ってこられたのはルター研究所の錚々たる皆さんであり、その実りを生みだす授産所は、毎年六月に行われているルター・セミナーに他ならない。セミナーでは宗教改革五百年に焦点を当ててこの四年間、推奨四冊と歩を合わせるように、「宗教改革の現代的意義」、「エンキリディオン小教理問答」、「アウグスブルク信仰告白」、「キリスト者の自由」といったテーマを取り上げ、その研究成果を『ルター研究別冊―宗教改革500周年とわたしたち』として世に問うてきた。

推奨四冊を小教理問答に譬えたとすれば、『ルター研究別冊』は大教理問答だと言えるか。なぜなら、同じテーマを二つの切り口で味わうことが出来、入門的アプローチで勘所を鮮やかに指し示してくれるのが推奨四冊だとすれば、ルター神学の奥深さ・味わい深さ、強みと弱み、そして何と言っても面白さ！をこれでもかとてんこ盛りに提供してくれる

のが『ルター研究別冊』だからである。

最新の第4号では「キリスト者の自由」をテーマに七名の論文が掲載されている。どの論文も素晴らしいが、特に「キリスト者の自由」が「奉仕」へとなかなか繋がっていないルーテル教会の問題点を指摘している立山師の論文（副題が「ルター派の弱点？」「よき業」と江藤師の論文（副題が「キリスト者の自由」）に見る「愛と奉仕」の神学的可能性）が刺激的であり、「今を問い、未来に踏み出す」ヒントを与えてくれている。

ルター・セミナーの面白さは、ルター研の所員の先生方を相手に、全国から志をもって集う信徒や教職が宣教の現場の視点から多くの問いを投げかけ、共に考え、共に神学すること（co-theologizing）ができる貴重な場であるということである。だからこそ、そこから励ましと力をもらって再び現場へと帰っていく喜びが与えられ、毎年六月が待ち遠しくなるのである。



二〇一六年度秋の講演会

『キリスト者の自由』における悪の問題」石居所員
鈴木所長は歴史的「ルーテル・カトリック合同礼拝」を報告

ルターの『キリスト者の自由』、それは罪からの自由を説く「魂の自由」の書として知られる。しかし、その書の中に、キリストから与えられるその自由をもって、悪が支配する現実社会を生きたためのメッセージを聞き出そうとする真摯な試み、それがこの日の石居所員の講演だった。

近代的人間の自由意思に対して、ルターは奴隸的意志を語り、悪い欲望に囚われる虚しさ、にもかかわらずキリストの十字架によって魂が解放され満たされるという福音を宣べた。さらにこの世での「愛と奉仕」に生きるとき、それは必然的に悪魔の支配に晒される。

石居氏は、現代を覆う悪の力として人間関係を破壊する成果主義、弱者・少数者を圧迫する社会構造、生きる意味を喪失させ欲望を増殖させる「暗闇」等々を挙げつつ、この矛盾を抱えている自分を受け入れ、「すべてを抱きしめて生きる」ためには、この現実の中でただ「キリストとともに」十字架を生きたるのルターの主張の核心を語った。それは自ら苦難を引き受けることと、「ひとりの小さなキリスト」として他者のために生きることである。言い換えれば、悪の支配する現実能耐え、なお確かな安らぎを受けて、終末

に約束されている神の国における正義と公平、平和を見据えつつ、今の時代で神のみ業に参与することだと締め括った。

鈴木所長は、宗教改革から五百年を経て史上初めて実現したルンド大聖堂での平和のためのルーテル・カトリック合同礼拝から帰国した直後だったので、そこで体験したことを臨場感溢れる言葉で語った。目の前で見たルーテル世界連盟議長とローマ教皇による共同司式、スウェーデン国王の臨席、共同声明（本紙二面の記事参照）の意義などについて一人称で伝え、参加者に歴史的な出来事を彷彿とさせた。昨年十一月三日（日）にむさしの教会を会場に開かれた「秋の公開講演会」には四〇名ほどの参加があった。（所員 江藤直純）

←（七面二段目より）

という言葉は英語訳よりも、私の心の深いところ刻まれています。日本を離れても私はこの言葉のように、日本の教会と本学で頂いた恵みを一生、忘れられないでしょう。共にルターについて学ばせて頂いたことは、私にとって神から与えられた恵みです。皆さまと一緒に歩ませていただきました。誠にありがとうございます。（所員・ルーテル学院大学教授）

ルター研究の名著シリーズ

グスターフ・アウレン 『勝利者キリスト』

（佐藤敏夫・内海革訳、教文館、オンデマンド版、二〇〇四年）

所長 鈴木 浩

スウェーデンの神学者アウレンの『勝利者キリスト』は、贖罪論（罪人の贖いに関する教え）を歴史的に論じた画期的な書物である。聖書には、救いの出来事を言い表す様々な言葉やイメージが出て来る。例えば、「救い」、「贖い」、「義認」、「永遠の命」、「罪の赦し」などである。その中で、救いの出来事を示す「罪人の贖い」という概念が、どのように理解されてきたのかを歴史的に分析したが、本書である。

「贖い」という言葉は、「買い戻す」という意味である。つまり、罪と悪魔の奴隷になっている罪人を買戻すことが、救いの出来事なのだ、という理解のことである。救いの出来事をそのような枠組みで理解した背景は、聖書が書かれた時代が、「奴隷制社会」だったことと大きな関係がある。奴隷は主人にお金で買い取られていた。奴隷身分からの解放は、「買い戻す」ことしかなかった。最初期の教会やそれに続く時代には、教会員に奴隷身分の人が大勢いた。神の恵みが、悪魔の奴隷になっていた人を「買い戻す」というイメージで語られたとき、それは、奴隷身分の人には大きな説得力を持っていた。だから、アウレンが言うように、少なくとも初代教会の時代には、「贖罪」という主題はキリスト教において絶対的に中心的な位置を占めている。アウレンは、ルンド学派のルター学者らしく、「モチーフ研究」という手法を使って、贖罪論を三つのタイプに類型化する。すなわち、「古典的類型」、「ラテン的類型」、「主観的類型」である。アウレンは、本書の第六章でルターの贖罪論を論じているが、冒頭で「ルター神学の中で贖罪に関するかれの教えほど大まかに一括して扱われたり、ひどく誤解されたりして来たものはないと言ってよい」と書き出す。その理由として、「根本的な失敗は、この主題に関するかれの教えがアンセルムス型（ラテン的類型）に属していると仮定してきたことであつた」と指摘される（二二〇頁）。そして、アウレンは「ルターの教えは、教父たちによって非常に深みのある仕方であられた、古い古典的贖罪思想のテーマの復興としてのみ正しく理解されうる」と結論づける（二二二頁）。

ルターについては、「義認論」との関連で語られることが多いが、救いの出来事を「贖罪」という観点で見るとも刺激的である。

「十字架の愛」



ティモシー・マッケンジー

今年は宗教改革五百年を記念する年となりますが、私が按手を受けてから二五年でもあります。このような記念の年に、ルターの著作の中から振り返ってみると、自分が最も影響を受けて何回も読み直してきた著作はルターの『ハイデルベルクにおける討論』だと言えます。この著作の最後の命題28は、幾ら年を重ねていっても、ルターが表現した「十字架の愛」という言葉の存在感を自分の人生の歩みの中で益々大きくさせる一方です。

ルターによると、イエス・キリストの十字架の受難の中に神の愛が隠されています。そして信仰を通して神の愛である恵みを人間は頂きます。命題28で、ルターは次のように書きます。「人間の中に生きている神の愛は、罪人、悪人、愚か者、弱い者を愛し、こうして彼らを義人、善人、賢い者、強い者にし、かくてむしろ流れ出て行って、善いものを与えるからである。それゆえ罪人は愛されているがゆえに美しいのであって、美しいがゆえに愛されるのではない。人間の愛は罪人や悪人を避ける。こうしてキリストは、『私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである』と語りたもうた。そしてこのようなものこそ十字架から生まれる十字架の愛である。この愛は、享受することのできる善に出

会う場所ではなく、むしろ悪しきものや悲惨なものに善を与える場所におもむくのである」。

これはルターが説いた「十字架の愛」です。そして、この愛は人間のアイデンティティーを新しくして全うする愛なのです。自分の年と経験を重ねていく中で、自分の力の限界がはつきり見えるようになります。若い頃に、自分は何でもできるというような思いはよくありましたが、少し熟した自分と若い頃の自分を比較すれば、自分の中から出せる善きものの小ささと無力さとはつきり見えるようになります。そして、自分の無力さに対して、神様に与えられた恵みである信仰の力と大切さについては、ほんの少し見えるようになりました。キリストの「十字架の愛」のみが、私たちが神の子として新しく創り上げて、私たちに奉仕者としての新しいアイデンティティーを与えて下さるのです。

今年の三月末に、短期宣教師（ジャー）の経験を含めた二八年間の宣教師歴を終え、帰国します。私は日本の教会と本学から沢山の恵みを頂きました。よく考えれば、自分の大人としての信仰の形づくりとその仕上げは日本で行われました。日本語訳のルターの「十字架の愛」

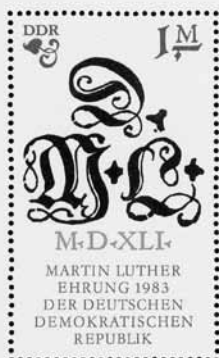
一五二二年に新約聖書のギリシャ語原典からのドイツ語訳を出版したのち、ルターは翌一五二三年から旧約聖書の翻訳に取りかかる。ヘブライ語原典からの翻訳でルターは苦労するのだが、大学の同僚者と共にメランヒトン（彼は語学の天才）の協力を得てようやく翻訳を終えた。こうして一五三四年、旧新約を合わせたルター訳ドイツ語『聖書』が出版された。牛一頭分の価格だったと言われる。ルターはその後も推敲と修正を続け、一五四一年、一五四五年に改訂版が出版された。

切手に見るルター ②4

ルター訳聖書

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一

今回紹介するのは一九八三年に旧東ドイツで発行された、ルター生誕五百年記念のうちの一枚、一五四一年版ルター訳聖書の表紙が描かれた小型シートである。表紙の中央には「聖書、これは聖なる書物のドイツ語全訳、マルティン・ルター博士、ザクセンの自由のために選帝侯の恵みによって、ヴィッテンベルク、ハンス・ルフトによる（印刷）、一五四一」と記されている。右側切手のデザインには、表紙中のマルティン・ルター博士の頭文字三字があしらわれている。



宗教改革500周年の年に

所長 鈴木 浩

●宗教改革500周年関連

二〇一六年十一月三日(祝日)に、長崎の浦上天主堂(カトリック浦上教会)で、「宗教改革500周年」を記念して、日本のカトリック教会と日本福音ルーテル教会の合同礼拝とシンポジウムが開かれる。参加するためには「入場券」が必要なので、インターネットであらかじめ申し込む必要がある。それとは別に、各教区でも独自の催しが予定されている(詳細は各教区に)。

●公開講座(二〇一七年度前期)

前期は「ルターの生涯」(江口副所長担当)と「ルター原典講読(ラテン語)」(鈴木所長担当)が開かれる。「ルターの生涯」は土曜日の午前一〇時半から正午まで、「原典講読(ラテン語)」は、木曜日の午後一時一〇分から二時四〇分まで行われる。なお、「ルター原典講読(ドイツ語)」(江口副所長担当)は、今年度は閉講となる。

●「信徒と牧師のためのルターセミナー」

六月の五日(月)から七日(水)にかけて、「マホロバ・マインズ三浦」を会場に行われる。主題は、「宗教改革500周年とわたしたち」(五回シリーズの最終回)である。このセミナーはいつもは牧師主体だが、今回は信徒の方々の参加

も求めて、六〇人規模(通常は二五人規模)で行われる。信徒の積極的な参加を願います。

●「秋の講演会」

今年の講演会は、日本福音ルーテル東京教会を会場に開かれる。日程は一月三十一日(宗教改革記念日)。主催はルター研究所であるが、今回は「講演と音楽の夕べ」と銘打っており、「ムジカ・サクレ・トウキョウ」(指揮、山田実氏)の演奏が予定されている。



●発足以来五〇年になる「一致に関するルーテルIIローマ・カトリック委員会」は、今年はポーランド福音ルーテル教会の招待で、ポーランドのルーテル教会(開催地、未定)で七月半ばに開かれることになった。

●ルター研究所の働きは、皆さん方の献金によって支えられています。今年は五〇〇周年ということもあって、いつもよりやや多目の経費がかかりそうです。皆さんのご理解とご支援をお願いします。

宗教改革 500 年記念

今年は信徒と牧師のためのルター・セミナー

「500年の年、ルターに出会う！」

●内容・プログラム

1. ルターの生涯
2. 「95ヶ条」を学ぶ
3. 宗教改革時代の美術
4. ルターと聖書
5. カトリック教会とルーテル教会の
エキュメニズムの流れ

質問コーナーの時間、話し合い、音楽鑑賞

●日 時 2017 年 6 月 5 日(月) 午後 3 時～6 月 7 日(水) 12 時

●場 所 マホロバ・マインズ三浦(神奈川県三浦市)

●費 用 2 万 5 千円(宿泊、食事、資料代込み)

●申し込み方法

メール neto@luther.ac.jp、FAX (0422) 33-6405

はがき 181-0015 三鷹市大沢 3-10-20

ルーテル学院大学ルター研究所

●定 員 60 名 4 月末日必着(定員に達したら締め切ります)

例年、ルター研究所は秋に公開講演会を開催しています。

今年は特別な年だから

「講演と音楽の夕べ」を催します。

日時 2017 年 10 月 31 日(火) 午後 6 時 30 分～

会場 日本福音ルーテル東京教会
(JR 山手線「新大久保駅」から徒歩 5 分)

ルター学者 2 名による講演

ムジカ・サクレ・トウキョウによる合唱(指揮 山田実氏)

主催 ルーテル学院大学・神学校 ルター研究所



(J 九州教区)

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三〇一〇二〇

電話〇四二二一三一四六一

編集担当…江藤 直純(所員)

江口 再起(副所長)

発行責任…鈴木 浩(所長)